様式Ｃ－１９

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成　25　年　6 月　7 日現在

機関番号：16102
研究種目：基盤研究（C）
研究期間：2010～2012
課題番号：２２５３０９８４
研究課題名（和文）　英国テイト・ギャラリーの教育普及活動における学校連携の方法と成果
研究課題名（英文）　On the Methods and Results of Educational Activities which Tate Gallery Promoted

研究代表者
山木朝彦（YAMAKI ASAHIKO）
鳴門教育大学・大学院学校教育研究科･教授
研究者番号：２０１５８０８３

研究成果の概要（和文）：
研修の機会などを通じた美術にたいする教師への教育と学校との連携という観点から俯瞰したとき、テイト・ギャラリーの教育普及活動全般が非常に質の高い内容を誇っていることを調査によって確認した。さらに、学校と連携して行われた実践的な教育プログラムであるバーバル・アイズ(Verbal Eyes)というプロジェクトの実施の方法と教育的意義の両面について、学芸員・教師・アーティストなど主要な関係者から聞き取り調査を行い、美術教育における美術館利用のあり方や表現活動と鑑賞活動を有機的に結びつける手法、そして、アーティストを媒介にした現代の美術の動向を学校に伝達する方法を明らかにした。

研究成果の概要（英文）：
All the phases of educational activities promoted by Tate Gallery in UK are prominent from the viewpoint of in-service training and maintaining partnership with schools. We investigated the methods and results of the practical program called as “Verbal Eyes” organized by Tate Britain in London. Through our inquiry of the interviews from the main persons who were involved in the program, such as curators, teachers and artists, we recognized the effectiveness of partnership between the museum and schools. And we could know the details of methods to tie artistic expression by learners with their activities of appreciation. Furthermore the inquiry reveals that the co-operation of artists and teachers in schools is an effective method to transmit the magnetism of contemporary art to learning process of art subject.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
2010 年度	1,300,000	390,000	1,690,000
2011 年度	1,000,000	300,000	1,300,000
2012 年度	500,000	150,000	650,000
年度			
年度			
総　計	2,800,000	840,000	3,640,000

研究分野： 社会科学
科研費の分科・細目：教育学
キーワード：教科教育、美術教育、鑑賞教育、美術館の教育普及

１．研究開始当初の背景
(1) 美術館と学校との連携に関する学的・実践的な研究の状況
一般に美術館の教育普及活動は、美術館の来館者にたいして作品解説を掲載したギャラリー・トークやギャラリー・カードもしくはワークシートと呼ばれる作品鑑賞のための手引きの作成と配布、そして文化講演会などの催し物の開催に限られている。子どもから成人まで幅広い来館者に対するアプローチとしては、そうした教育媒体と解説的な内容が有効であると考えられていた。しかし、学校における図画工作科や美術科という造形教育の理念と方法に照らしてみた場合、それらの方法は、どちらかといえば成人を対象とする一方的な知識の提供に傾いており、必ずしも児童生徒の関心を引くものではなかった。歴史的にみると、これを改善する美術館側での模索や積極的な取り組みも存在する。最も画期的な取り組みは、青山こどもの城が企画・主催した「モダンアートどんなもんだ!? 体験こども美術館」(1991) であり、ここでは子どもの体験を活かした「動的鑑賞法」が実践された。広島市現代美術館が主催した「子どものための美術展 アートスウィートホーム」(1999) も子どもの興味・関心をベースに企画された美術展であり、前者は前田ちま子、後者は岡本芳江という研究者の資質を持つ学芸員がアメリカの鑑賞理論を踏まえながら展開したものである。学校と美術館との連携が進展している現在、子どもの活動や興味・関心に基づいたこのような展覧会の企画がほとんどみられないのは残念なことである。
学校での鑑賞教育についていえば、アメリカのゲッティー財団が後援した DBAE (Discipline Based Art Education) の考え方が、藤江充（愛知教育大学教授）や前村晃（佐賀大学教授）、そして山木朝彦（鳴門教育大学教授）などによって 1990 年代に紹介され、美術史・美学・美術批評・制作学などの成果を取り入れた鑑賞教育の重要性とその現場での実践可能性が示唆されたが、学会誌や専門書など、理論的な次元での考察に留まった観を否めない。
手探りで鑑賞の教材を開発する段階が続いていたが、アメリア・アレナスの対話型鑑賞法というメソッドを基礎にした展開を上野行一（当時:高知大学教授）が精力的に展開し、美術史理解的な鑑賞教育に対して、PISA 型読解力を能動的に身につけさせる方向において、一定の研究成果を上げていることが科学研究費補助金データベースで確認できる。鑑賞教育の充実を図る美術教育の流れをこのようなに整理して俯瞰すると、国内の鑑賞教育における学術的な理論研究と実践的研究はいずれも、アメリカ合衆国の美術館において開発されたものをベースにしているといえよう。
この研究では、むしろ、英国において、確かな学力を育成する鑑賞教育の方法を意識化している美術館の教育的アプローチをつぶさに研究することで、ともすれば、アメリカ合衆国における美術館の教育普及に焦点化しがちな日本の美術教育の流れに視野の拡がりをもたらしたいと考えている。

(2)これまでの研究成果を踏まえ着想に至った経緯
研究代表者（山木朝彦）の研究成果と研究テーマの着想の関連について述べることで、研究開始当初の背景について振り返ると次のように言えよう。平成 16 年度から平成 18 年度にかけて、山木は個人の申請により、「美術館と学校が連携して進める美術鑑賞教育の実践的方法論の開発」(基盤研究(C)研究課題番号：16530599)の研究を実施し、その成果を平成 17 年度末と平成 18 年度末に報告書として発行した。この中で、明確になったのは、a)たしかな教材の開発には美術教師と学芸員との協力関係が不可欠であり、そのシステム構築が鍵であることと、b)魅力ある学習材の開発には、教師による鑑賞対象の十分な理解が不可欠であるということであった。また、問いかけを含む問いの意味内容を吟味する必要性をテイト・ギャラリーが提供するワークシートの分析を通じて認識した。

２．研究の目的
・テイト・ギャラリーが提供する鑑賞教育プログラムのうち、主として小学生を対象とする表現および身体活動を伴う学習プログラムのねらいと教育成果について美術館サイドと学校サイドの両面から取材し研究する。

・テイト・ギャラリーが提供する鑑賞教育プログラムのうち、教師の教材開発を手助けするために編まれた教師の手引きの目的と内容を文献研究の手法により吟味する。また、この美術館における教育アプローチ全般について、その種類と、それぞれの教育普及活動を担う組織（組織図）を明らかにする。

・美術館による学校連携のプログラムから、

成功したと思われる教育的アプローチを選択し、美術館サイドと学校サイドからその成果を聴き取り、教師による作品理解の深化や子どもの鑑賞活動へ理解の深まりが、教育の質の向上につながることを検証する。

・上記二種のプログラムをもとに、a)日本の美術鑑賞教育に役立つ要素を抽出し、これを生かした鑑賞教育の方法論を提案し、教材開発の視点を明らかにする。また、テイト・ギャラリーは数多くのプログラムを提供しているが、b)これらに対して、日本の教育課程に沿った分類と整理を行い、実施可能な教育方法を立案する。

３．研究の方法

平成 22 年度は、テイト・モダン（Tate Modern）とリヴァプール市にあるテイト・リヴァプール（Tate Liverpool）さらにロンドン市内でテイト・ギャラリーの鑑賞プログラムを利用した学校で、展示方法と関連した教育普及活動の実際を観察し、「資料収集」を行なった。

また、テイト・ブリテン（Tate Britain）が中心となって実施した学校連携の教育活動のうち、特に規模が大きくユニークな取り組みといえるバーバル・アイズ(Verbal Eyes)というプログラムについて、これを企画した学芸員と、このプログラムに参加した小学校の教員に対して対面の「インタビュー」を実施し、その全体像の把握に努めた。

同時に、英国における鑑賞教育の基礎的文献と美術館を利用する美術館と学校との連携にかかわる文献について「文献研究」を行った。

平成 23 年度は、テイト・ブリテンでの「資料収集」に加えて、前述のバーバル・アイズにかかわり、学校に派遣された主要なアーティストから、対面の「インタビュー」による聴き取り調査を行った。「文献研究」については継続的に行い、これをもとにして客観的な視点から調査をまとめた。

平成 24 年度は、二年間の現場での「観察」「資料収集」「インタビューによる聞き取り調査」「文献研究」などの研究の方法に基づき、テイト・ギャラリーが開発し提供している教育的なアプローチの全体の教育的意義を検討した。

特に、バーバル・アイズというプログラムの教育的な意味について検討し、その有効性の検証と評価を行った。これをもとにして、表現と鑑賞領域を効果的に結びつけるための手法について整理し、それらの研究成果を学会にて発表し、研究成果報告書を執筆するという研究手法をとった。

４．研究成果

テイト・ギャラリーの教育普及活動は、義務教育課程の学校との連携と美術にたいする教師教育および相互啓発に基づく非常に質の高い内容を誇っている。

特に、美術館と学校が連携して行なう、実践的な教育プログラムはユニークであるだけでなく、その規模も大きい。その実施の方法論と教育的意義の両面について、主要な関係者からの聞き取り調査を行い、美術教育における美術館利用のあり方を検討した。

具体的に言えば、平成 22 年度には、バーバル・アイズという教育プログラムの企画立案と実施にかかわった学芸員 2 名とこのプログラムに参加した小学校教員(ミルバンク・プライマリースクールの教員)2 名からの聴き取り調査を実施し、平成 23 年度には、同プログラムにおいて学校に派遣されたアーティスト 3 名から、インタビューによる詳細な聞き取り調査を実施した。平成 24 年度には、各々から聴取した調査内容を照合し、整理し、バーバル・アイズという教育プログラムの実像を立体的に把握することができた。

具体的に言えば、バーバル・アイズは 2006 年から 2010 年まで実施された学校連携のプログラムである。それは、ロンドン自治区のニューアム（Newham）とウェストミンスター（Westminster）の複数の小学校と中・高等学校に、それぞれ 2 名のアーティストが派遣され、教師との協力のもとに魅力的な鑑賞・表現活動の指導を展開するという内容の教育プログラムである。教師とアーティストは相互啓発の関係にあり、基本的に対等である。

流れとしては、各学校から 2 学級の児童生徒がテイト・ブリテンに来館して、対象となる芸術作品を鑑賞する。ここから得たインスピレーションをもとにして、児童生徒たちは共同制作という形態で、作品を完成させる。最終段階では、テイト・ブリテンの展示室において、生徒作品が展示される。その展覧会には、家族や地域の住民が招かれる。同時に、他の学校の児童生徒と一般の来館者にも公開される。

美術科教育学会での口頭発表のための研究協議を通じて、この教育プログラムには、アーティスト・教員・学芸員にとって相互啓発的な要素が含まれていること、現代の美術の動向を学校に伝達する実験的性格を帯びたものであったこと、さらに、テイト・ギャラリーを生徒の作品展示の場としても活用することで、表現活動と鑑賞活動を有機的に結びつけることに成功していることがわかった。また，アイディアズ・ファクトリー(Ideas Factory)という 2004 年から 2006 年にかけて実施された学校連携プロジェクトによる成果の吟味と反省に立った企画立案だったことも明らかにできた。

平成 25 年 2 月に「こどもの城」研修室（東

京・渋谷区）にて、「テイト・ギャラリーの教育アプローチ」というタイトルを付して、科学研究費助成による本研究成果の報告会を実施した。平成25年3月には、3年間の最終年度として、この研究成果報告会と美術科教育学会での発表内容などを編集して纏めた報告書を発行した。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計１件）
塚田美紀 山木朝彦 井上由佳　テイト・ブリテンの学校プログラム-バーバル・アイズ（Verbal Eyes）参加アーティストの視点から 査読無　女子美術大学美術教育研究　第1巻　2013 1-10

〔学会発表〕（計４件）
(1) 山木朝彦　井上由佳　塚田美紀 酒井千波　テイト・ギャラリーの教育普及から学ぶこと-Verbal Eyesなどの教育プログラムを中心に　第 35 回美術科教育学会　2013.3.28 島根大学（島根県）

(2) 山木朝彦　井上由佳　塚田美紀　テイト・ギャラリーが展開した教育普及活動における芸術家の役割-バーバル・アイズにおける芸術家へのインタビューを通じて　第 34 回美術科教育学会　2012.3.25 新潟大学（新潟県）

(3) 山木朝彦 井上由佳 テイト・ギャラリーが展開する学校連携プロジェクトについて-その運営組織と方法 第33回美術科教育学会 2011.3.27 富山大学（富山県）

(4) 山木朝彦　井上由佳　美術館と学校の連携の成果と課題-テイト・ギャラリーが展開するプロジェクトの調査・分析を通して 第 4 回日中教師教育学術研究集会 2010.12.12 鳴門教育大学（徳島県）

〔図書〕（計１件）
山木朝彦　井上由佳　塚田美紀　酒井千波 英国テイト・ギャラリーの教育普及活動における学校連携の方法と成果　鳴門教育大学山木朝彦研究室　2013.3.31 全80頁

６．研究組織
(1)研究代表者
山木 朝彦（YAMAKI ASAHIKO）
鳴門教育大学・大学院学校教育研究科・教授
研究者番号：20158083

(2)研究分担者
井上 由佳（INOUE YUKA）
文教大学・国際学部・講師
研究者番号：90469594

(3)研究協力者
塚田 美紀（TSUKADA MIKI）
世田谷美術館・学芸員
女子美術大学・嘱託講師